

V ヤシナイの解釈と用法

2005（平成 17）年入学

言語学・応用言語学専攻

1LT05120T 廣永智子

2009（平成 21）年 1 月提出

要旨

本論文は、日本語の否定表現「V ヤシナイ」について、「V ヤシナイ」の意味に (i)「不満を表す意味」と(ii)「不満以外を表す意味」の二つの解釈があることを示した。さらに、「V ヤシナイ」の解釈の性質に関して、以下のことを主張する。

- (i) 不満を表す「V ヤシナイ」には、「V して当然」という前提は不必要である。
- (ii) 不満以外を表す「V ヤシナイ」において、V が意思性を持つ動詞が来た場合、「V する理由がない」という解釈となる

(i)については、「V して当然なのに V しないことに対する不満」を「V ヤシナイ」を用いて表すと考えた。しかし「不満」という感情を抱く状況を考察した結果、「V して当然」という意味は「不満」感情に含まれており、「V ヤシナイ」に内在しないとして「不満」に特定の前提は不必要であるとわかった。また(ii)では、動詞に意思性があれば「V する理由がない」の意味となるが、意思性がない場合はその意味にできない。そこで動詞の意思性の有無が「V ヤシナイ」の解釈にどのような影響を与え得るのかを調べた。すると意思性のある動詞の場合は不満を引き起こす原因や、「V する理由がない」と述べる根拠は主語に内在すると解釈できる傾向があること、意思性のない動詞の場合はその傾向がないことがわかった。

目次

1. はじめに	1
1.1. 「V ハシナイ」	1
1.2. 「V ルコトハナイ」	2
1.3. 「V ヤシナイ」	5
2. 先行研究	5
2.1. 否定表現の意味論的研究：泉井(1953).....	6
2.2. 否定表現の統語論的研究：丹保(1980, 1984)、呂(2001)、野田(1995).....	6
3. 「V ヤシナイ」が表す意味.....	7
3.1. 不満を表す「V ヤシナイ」	7
3.1.1. 「当然」という状況.....	7
3.1.2. 「不満」を表わす自然な状況	9
3.1.3. 結論	11
3.2. 不満以外の意味を表す「V ヤシナイ」	11
4. 「V ヤシナイ」と動詞の種類との関連.....	12
4.1. 動詞の分類.....	12
4.2. 例文を用いた考察.....	14
4.2.1. 意思性のある動詞.....	14
4.2.2. 意思性のない動詞.....	15
4.3. 結論.....	17
5. まとめ	19

1. はじめに

日本語の「動詞(V)+否定形」には「V ナイ」以外にも、「V ハシナイ」や「V ルコトハナイ」、「V ヤシナイ」、など様々な形がある。同じ「動詞(V)+否定形」でも、「V ナイ」とはそれぞれ異なる種類の否定を表す場合があり、「V ナイ」と使い分けられることがある。本論文では「V ナイ」と、「V ナイ」を除く「動詞(V)+否定形」との意味の違いにまず着目し、「動詞(V)+否定形」の中でも「V ヤシナイ」を研究材料としてとりあげている。

最初に、「V ナイ」以外の代表的な「動詞(V)+否定形」がどのようなものがあるかを紹介し、その後「V ヤシナイ」が持つ意味や、動詞との組み合わせによる解釈の違いについて詳しく論じていく。

1.1. 「V ハシナイ」

「V ハシナイ」を用いて否定文を作ると、以下のようなものになる。

- (1) a. 明日の試合は格下との対戦だから、負けないだろう
b. 明日の試合は格下との対戦だから、負けはしないだろう。
- (2) a. 花子は太郎にバイオリンをあげなかった。
b. 花子は太郎にバイオリンをあげはしなかった。
c. 花子はバイオリンを太郎にあげはしなかった。

(1a)では単に「負けない」という予測をしているにすぎないが、(1b)では「最悪でも負けることだけはない」という予想を示している。また、(2a)が「バイオリンをあげなかった」という行動を示すのに対し、(2b)は「あげる」以外の行動(「貸す」など)をとった可能性、もしくはバイオリン以外のものをあげた可能性を示す。(2c)では、太郎以外の人物にバイオリンをあげた可能性が考えられる。

また、「V ナイ」を用いた場合には容認度が低く、「V ハシナイ」を用いた場合には自然度の高い文になるものもある。なお、??は容認度が低いことを示す。

- (3) a. ??僕はロンドンで生まれなかった。
b. 僕はロンドンで生まれはしなかった。

(3b)の文は、「ロンドンで生まれこそしなかったが、ロンドンに関わったことがある(例：ロンドンで育った、ロンドンの学校に通っていた)」という意味にとらえることが容易である。一方(3a)の文は、文脈によっては不自然な文ではないが、(3a)だけを見ると不自然な文である。不自然な原因は恐らく、「生まれた可能性のある場所からロンドンを除外する」

ということが、受け手にとって非常に情報量に乏しいことと考えられる。人間の生誕地となる可能性をもつ場所は地球上に無限にあり、その中からロンドンがひとつ除外されても受け手にとって有益な情報ではない。こういった情報を発話すること自体が特殊であり、このことから(3a)は不自然であると考えられる。(3b)の方は、「V ハシナイ」を用いることによって「生まれてこそいないが」という含みをもたせており、ロンドンと発話者が何らかの形で関わっていることは示唆できている。(3b)は(3a)に比べれば情報量は多いので、容認度が高いと考えられる。

このように、係助詞「ハ」があることによって、「V ハシナイ」はVしないこと強調したり、Vをしないかわりに異なる行動をとるといったような新たな可能性を示唆する。この点が「V ナイ」とは異なっている点である。なお、「V ハシナイ」に関しては、「V ワケデハナイ」「V ノデハナイ」といった否定形と共に、野田(1995)において分析されている。

1.2. 「V ルコトハナイ」

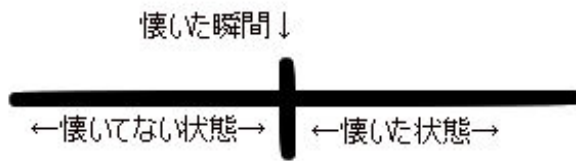
また、「V ルコトハナイ」を用いると、「V ハシナイ」とも異なる意味になる。

- (4) a. 彼女が私の気持ちを知らない。
b. 彼女がわたしの気持ちを知ることはない。
c. 彼女がわたしの気持ちを慮ることはない。
- (5) a. その子犬がわたしに懐くことはない。
b. その子犬がわたしに吠えることはない。

(4a)は今時点での事実を述べているだけだが、(4b)や(5a)は「現在から未来にわたる完全な否定」であり、彼女がわたしの気持ちを知る(子犬がわたしに懐く)可能性が一切ないことを示している。一方、(4c)や(5b)はこの完全な否定という解釈の他に「現段階ではそういった状態が続いている」という別の解釈もできる。即ち、彼女がわたしの気持ちを慮る(子犬がわたしに吠える)可能性を未来まで完全に否定しているわけではない。

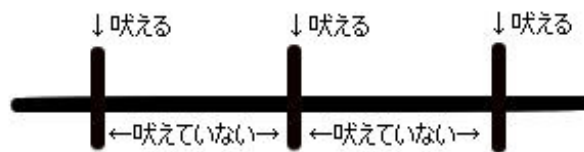
こういった違いは動詞の性質に起因している可能性がある。一般的に、(4b)や(5a)に用いられている「知る」や「懐く」という動詞は、一度Vされれば、再びVされていない状態になることはないと考えられる。一度事象Aを知れば、再び事象Aを知らない状態に戻ることは通常起きないし、一度自分に懐いてきた犬が懐いていない状態に戻るということは一般的には考えにくい。

例：懐く



その一方で、(4c)や(5b)に用いられている「慮る」「吠える」といったような動詞は、「Vしている状態とVしていない状態が交互に起きる」動詞であると考えられる。

例：吠える



このことから、「～することはない」という言い方は、状態を表す動詞であるか、行為を表す動詞であるかによって、否定する部分やその意味合いが大きく変わると考えられる。

また、「Vルコトハナイ」を用いる際は、あまり感情などは入らず、ただ事実のみを述べる性質が強い傾向がある。

- (6) a. 少しくらい腐ったものを食べても、死なないよ。
 b. 少しくらい腐ったものを食べても、死ぬことはないよ。

(6a)は食べ物の傷みに対する過剰な心配を少し揶揄する響きがあるが、(6b)は単純に予測を述べているだけで、それ以上の感情が感じられない。単に「死ぬ」可能性を否定しているだけである。これを確認する例として、「気が進まない」という、予め負の感情を前提とした動詞を用いて例文を作成した。??は容認度が低いことを表す。

- (7) a. 彼に本当のことを言わないといけないけど、気が進まないなあ。
 b. 彼に本当のことを言わないといけないけど、気が進みはしないなあ。
 c. ??彼に本当のことを言わないといけないけど、気が進むことはしないなあ。

「Vナイ」という単純形ではなくとも、(7b)と(7c)の容認度には開きがあるように感じられる。(7c)は「Vルコトハナイ」という感情に乏しい否定が、感情が予め含まれる「気が進まない」という動詞に接続されて齟齬が生じた可能性がある。

しかし、「気が進まない」という単語は通常否定形のみが用いられ、「気が進む」という言い方は殆どされない。

しかし、「V ルコトハナイ」を「気が進まない」という動詞に接続する際は、「気が進むことはない」となり、「気が進むこと」という聞きなれない形になる。このことが容認度を下げしており、感情の有無は無関係の可能性もあるので、さらに詳細な検討が必要である。

また、「V ルコトハナイ」には「V ル」の部分と「コトハナイ」の部分、ふたつの時制が存在する。ふたつの時制が揃っているか異なっているかで、意味に違いが生じる。

- (8) 僕は面と向かって悪口を言われることはない。
- (9) 僕は面と向かって悪口を言われたことはない。
- (10) 僕は面と向かって悪口を言われることはなかった。
- (11) 僕は面と向かって悪口を言われたことはなかった。

(8)は日常の中で「悪口を言われる」という事象に行き当たらないという意味、もしくは未来に渡っての否定である。(9)は現在の状態というよりは、「面と向かって悪口を言われた経験」という、経験の有無を述べている。(10)では、特定の環境下での経験を述べている可能性がある。「面と向かって悪口を言われる可能性」がある特定の環境下において、その経験は無かったということである。発話段階では既にその環境に発話者はいないと考えられる。(11)は(10)と同義であるとも考えられるが、ある過去の時点まで「言われたことはなかった」という意味ともとれ、現在は「面と向かって悪口を言われる経験をした」とも考えられる。

(12),(13)は(10),(11)と同じ時制であるが、(10)(11)に比べ違いが明確である。(13)の「出会ったことはなかった」という言い方では、過去のある時点ではそうでも、現在の状態はどのようなかを想起させる。しかし「彼女は死んでいることから「現在」がなく、その部分で「出会ったことはなかった」という言い方と齟齬が生じている可能性がある。

- (12) 彼女は死ぬまで、運命の人と出会うことはなかった。
- (13) ?彼女は死ぬまで、運命の人と出会ったことはなかった。

また、現在形と過去形では、単に時制を表すのではなくて、現在形はただその事象の内容、過去形はその事象を経験したことを表すから(13)は不自然であるという可能性もある。

(12)の言い方の場合、「人生で様々な経験する中でのひとつの経験として、運命の人に会った経験」について述べているように感じる。しかしここでは、他の経験などは無視して、「運命の人に会う」という行為のみに重点を置いているのではない。そのために

(13)は不自然に感じる可能性もある。

以上のように、「Vルコトハナイ」もまた、「Vナイ」とは異なる意味を持っている。

なお、「～コトハナイ」は形容詞に接続する用法(例：美しいことはない)もある。しかし本論文では「動詞(V)+否定形」について論じているので、形容詞に接続する用法についてはここでは触れない。

1.3. 「Vヤシナイ」

「Vヤシナイ」も、「Vナイ」と異なる意味的特徴が見られる。

例えば、(14a)の「Vナイ」の例では、「母が祖母に料理を習わない」事実をそのまま述べているだけだが、(14b)の「Vヤシナイ」の例では「母が祖母に料理を習わないことに対する不満」を発話者が抱えていることが感じられる。次に(15a)と(15b)を比較すると、(15a)の「Vナイ」の例よりも「Vヤシナイ」の例(15b)の方がやや「雨が降らない」ということを強調している。

(14) a. 母は祖母に料理を習わない。

b. 母は祖母に料理を習いやしない。

(15) a. このあたりに雨は降らないよ。そういう気候なんだ。

b. このあたりに雨は降りやしないよ。そういう気候なんだ。

このように(14),(15)から、「Vナイ」と「Vヤシナイ」には、意味的に明らかな差異が生じていることがわかる。また、「Vヤシナイ」の例同士を比べると、(15b)は(14b)のように、何らかの不満を表しているとは捉えにくい。(14b)と(15b)の「Vヤシナイ」の意味にも違いが生じている。

これらの点から、「Vヤシナイ」には特有の用法や解釈があるものと考えられる。本論文では、文脈や動詞の種類に着目して、「Vヤシナイ」の用法・解釈を考察する。

2. 先行研究

「Vヤシナイ」に考察するにあたって、これまで「動詞(V)+否定形」を含めた否定表現についてどういった研究がなされてきたのかを本章で見ていく。

日本語の否定表現については、否定の意味が文のどの範囲まで及ぶかという問題や、否定の度合、格助詞との関連などが重視されており、以下のような研究がある。

2.1. 否定表現の意味論的研究：泉井(1953)

泉井(1953)では、否定表現を意味論の観点から分析している。ある事象 A について、第三者は A の基準心象(=Aらしさを表すイメージ)を持っている。そしてその第三者が事象 x を目にしたときに、x に対してその場で抱く心象(現場心象)と事象 A に対する基準心象との合致の度合が、「A=x」か「A≠x」いずれの判断になるかを分けるとした。「A=x」と言える際の基準心象と現場心象の合致度を「肯否の因子」として仮に g と置き、基準心象と現場心象の合致度が g から見て正の方向にあるのか負の方向にあるのか、g とどのくらいの差があるかを見ることによって、否定表現は「否定の量と方向との種々性がある」と述べている。

2.2. 否定表現の統語論的研究：丹保(1980, 1984)、呂(2001)、野田(1995)

文法的な観点では、文中の格助詞と否定を表す語「ない」との関係が否定表現の意味に深く関わりとて研究がなされている。

丹保(1980)では「V ナイ」について、V にかかる名詞+格助詞の格助詞部分が V の分出的格 (V との結合力が強い格) であるか、付加的格 (V との結合力が弱い格) であるかによって、否定表現の解釈が異なるとした。格助詞に加えて係助詞も否定文の意味に大きく影響しており、丹保(1984)では係助詞「は」に着目している。格助詞「から」+係助詞「は」をとりあげて、文中のどの格に該当するかということと「は」の意味の関連を調べた。その結果、(i)とりあげた格助詞「から」が動詞にとって分出的であるか単純付加的であるか、またはそれ以外かという点、(ii)否定文であるか肯定文であるか、(iii)名詞+格助詞「から」+係助詞「は」が文中のどの格に該当しているか、という3点に係助詞「は」の意味が関わっていると述べている。丹保は『係助詞「は」の本質は「とりたて」にある。そしてそれを意味の面から言えば、主題と対比と言うことになる』と述べており、(ii)で述べたように否定文と肯定文で係助詞「は」の違いが生じている。呂(2001)においても、否定文中で係助詞「は」を使用することによって否定焦点が異なるとしていることから、否定文中の助詞「は」は研究の対象となることが多い。

野田(1995)では、「V ハシナイ」や「V ノデハナイ」といった、否定辞の中に助詞「は」が含まれている否定表現についても調べている。しかし、否定表現の従来の研究は前述したような、格助詞と「V ナイ」との関連に偏ったものであり、「V ナイ」以外の否定表現(「V コトハナイ」など)の考察はあまりなされていない。野田(1995)についても、とりあげたのは『とりたて助詞「ハ」を含む否定』であり、助詞部分に強く注目している。本論文でとりあげる「V ヤシナイ」に関しても、言及している論文は見つかっていない。

3. 「V ヤシナイ」が表す意味

1章の(14b),(15b)であげたように、「V ヤシナイ」の意味は複数あると考えられる。

(14) b. 母は祖母に料理を習いやしない。

(15) b. このあたりに雨は降りやしないよ。そういう気候なんだ。

(14b)と(15b)の違いの最も明確な点は「不満が表れているかどうか」という部分であることから、「V ヤシナイ」の意味について、「不満を表すかどうか」という点で大きくふたつに分けて、考察を行っていく。

3.1. 不満を表す「V ヤシナイ」

まずは、(14b)タイプの発話者の不満の感情を表しているとして解釈できる「V ヤシナイ」について考察する。

(16) 裕子は大学に来やしない。

(17) 吉田くんは魚を食べやしない。

(18) 兄は働きやしない。

(19) 野菜が育ちやしない。

(20) 注文した本が届きやしない。

(16)-(20)は、いずれも発話者があることについて不満を抱いていることを表すことができるが、一口に不満と言っても様々な不満がある。「V ヤシナイ」を用いて不満を述べるときに、不満の傾向に何らかの特徴がないかどうかを調べる。

そこで、(16)-(20)の文章について、不満を表す文として容認度が高い状況を考えてみる。その状況に共通した性質があれば、「V ヤシナイ」をどういったときに用いるか説明することが可能になる。

3.1.1. 「当然」という状況

まず、(16)-(20)の例文の容認度が高い状況をカッコ内に設定した。

(21) (裕子が怠け者で学校をさぼってばかりいる) 裕子は大学に来やしない。

(22) (吉田くんは好き嫌いが多く、魚も嫌いなので食べない) 吉田くんは魚を食べやしない。

(23) (兄は働けるのに、親のすねをかじっている) 兄は働きやしない。

- (24) (手入れはしているのに、雨が降らないなどの要因で野菜が育たない) 野菜が育ちやしない。
- (25) (届いてもいい頃なのに本が届かない) 注文した本が届きやしない。

(21)-(25)に設定した状況はいずれも、他者に不快感を与え得る状況であるが、その他にも共通した特徴が見られる。それはどの状況も「発話者は、主語が V して当然と思っているのに、V していない」状況である。

(21),(22),(23)に関しては、主語はいずれも、V すること自体は可能である。例えば(21)では、一般的に学生であれば学校に行くことは当然、生きていく上で魚を口にすることは当然、働ける状態にあるのなら働くのは当然のことである。少なくとも発話者にはその概念があり、それがなされていないことに対して「V ヤシナイ」を用いて不満を表明している。

一方、(24),(25)は、V が「育つ」「届く」という主語の意味で左右できない動詞であるため、主語自体に V することが可能かどうかという点は不明である。しかし、(24)では手入れをしていたり、(25)では「届くはずの時期なのに」と考えているところから、主語をとりまく環境に、主語が V することが発話者にとって当然と思える要因があると考えられる。

以上のことから、「V ヤシナイ」を用いて不満を表す場合、「発話者は、主語が V して当然と思っているのに、V していない」状況があると考えられる。これが適切であるかどうか、次のような方法を用いて次項で検証する。(16)-(20)の例文の状況を、(21)-(25)とは異なるものに設定した例文を考察して検証する。設定する状況は、「発話者が主語が V して当然だと思う前提がない」状況である。こういった状況下で「V ヤシナイ」を用いた例文の容認度が下がるのかどうかを見る。(16)-(20)の例文について、「V することが当然という前提が無い状況」を想定した。なお、#はカッコ内の状況下において、例文の容認度が低いことを表す。

- (26) (裕子は海外留学中で日本にいない) #裕子は大学に来やしない。
- (27) (吉田くんは魚アレルギーだと発話者が知っている) #吉田くんは魚を食べやしない。
- (28) (兄は病気療養のため入院している) #兄は働きやしない。
- (29) (野菜が育たないことが明らかな枯れた土壌での栽培) #野菜が育ちやしない。
- (30) (発送先の住所を自分が間違っって登録していることに気づいた) #注文した本が届きやしない。

(26)-(30)に付加した状況はいずれも、V することがそもそも不可能な状況であり、「V す

ることが当然という前提が無い状況」である。しかし、(26)-(30)の例文は容認度が下がる。1章で例示した(15b)のような意味と解釈することはできるが、不満を表す文としては容認度が低い。

3.1.2. 「不満」を表わす自然な状況

だが、この考察には問題点がある。それは、「Vすることがそもそも不可能な状況で、Vしないことに対して不満を述べる」ということの不自然さが、「Vヤシナイ」の容認度を低めている可能性があるからである。

たとえば、犬は一般的には表情が無いとされているが、犬に関して「うちの犬は笑わないんだ」という不満を述べたり、年中寒いことが予測される北極で「暖かくない」と不満を述べるのは、状況的には非常に不自然であり、それを発話する状況が非常に想定しづらい。(26)-(30)の例文においても、同様のことが言えるのではないか。つまり、「Vすることがそもそも不可能な状況下で『Vヤシナイ』を用いて不満を表明すること」が容認度を低めているのではなく、「Vすることがそもそも不可能な状況下で**不満を述べる**こと」自体が極めて不自然だということである。

加えて、不満というのは「最低限満たされるべき点が満たされていない時」に発生することが多い感情であり、この「最低限満たされるべき」というのが「当然」に該当していることも考えられる。この場合、「Vヤシナイ」に「Vして当然である」という意味が含まれているのではなく、不満の感情に「Vして当然である」という意味が含まれていることになる。

そこで、「Vヤシナイ」という言語形式に「Vして当然である」という意味が含まれているのか、これまであげた、「Vヤシナイ」の容認度を高めている不満の状況そのものが「Vして当然」という意味を含んでいたにすぎないのかどうかを調べる。

「Vヤシナイ」に「Vして当然なのにも関わらずVしないことへの不満を表す」意味があるかどうかを確かめるためには、次のような点に注意して例文を作成する必要がある。まず、(i)実際に述べる不満が、その状況で抱く可能性があると考えられる不満である点がある。例えば、総じて表情が無い生物である犬に対し、「犬が笑わない」という不満を抱く可能性が極めて低く、そのような状況で「犬が笑わない」と不満を述べることは、極めて不自然なのである。このように「不満を抱く」ということは、「その不満が解消される可能性がわずかでもあると考えられる」ということである。従って、作例の際は「実際に述べる不満が解消される可能性がある状況」が想定可能なのか、注意を払う必要があるのである。次に、(ii)「発話者は主語がVして当然とは思わないが、Vしないことに不満がある」という文脈にする点である。不満を述べる際、もし「Vヤシナイ」自体に「Vして当然と思うのにVしないことが不満」という意味が込められていれば、「Vして当然とは思わないがVしないことが不満」というときに「Vヤシナイ」を用いると容認度が低くなる

はずである。先ほど述べたように、「Vして当然」という前提を排除する際、「Vする可能性がない」としてしまうと極端な例となり不自然となる。

- (31) (i) 主語がVすることは発話者にとって不自然だが、Vする可能性はわずかでもある
(ii) 「Vヤシナイ」で不満を述べる時、状況に対して不自然でない不満である

これらの点をふまえて、以下のような状況で「Vヤシナイ」を用いて不満を述べる文を考える。

- (32) 発話者は、主語がVして当然とは思っていないが、発話者本人の願望として主語がVしてほしいと思っている。しかしそれが叶わないので、不満を述べる状況。

もし「Vヤシナイ」に「Vして当然」という意味があれば、(32)の状況で「Vヤシナイ」を用いた場合、「発話者は主語がVして当然とは思っていない」という部分と齟齬が生じるので、容認度が低くなると考えられる。さらに、例文の判断を行う際には、(26)-(30)のように、例文外で状況だけを説明しても容認度の判断がつきにくいことが予測される。そのため、ひとつの「Vヤシナイ」について例文を会話文の中に埋め込み、その状況についてなされる会話の中で検討することにする。

そして検討した結果、いずれの例文も容認度が低いということにはなかった。例えば(33)では、3歳児が後先考えた行動をとることは当然とは考えにくい、「後先考えやしない」と言っても不適格であるとは言えない。同様に、(34)では葬式で笑うということが当然とは言えないし、(35)でも一般的な日本人の感覚ではとかけ料理を食べて然るべきとは言えないが、だからといって「笑いやしない」や「食べやしない」が不適格であるとは言えない。

- (33) 考えやしない

鈴木「うちの妹はやっと3歳になったよ」

田中「そうなんだ、まだまだ小さいね」

鈴木「言うことを全然聞いてないんだ、後先考えやしない。この前も走ったらあぶないよって言うのに聞かないで、庭で転んでけがをしたんだ」

田中「それは大変だったね」

- (34) 笑いやしない

佐藤「今日は山田の葬式だったんだ」

吉田「ああ、そうだったんだ。」

佐藤「渡辺が笑い飛ばしでもすればおもしろかったんだけど、渡辺は笑いやしない。ちよっとつまらなかったよ」

吉田「お前性格悪いよ」

(35) 食べやしない

田代「この前、野村と中国に行ったら、レストランでとかげの料理がでてきたんだよね」

柴田「うわあ、気持ち悪いね」

田代「ぼくも食べられなかったんだけど、野村のやつも、気持ち悪がって食べやしないんだよ。お店の人に睨まれたよ」

柴田「でも、日本人には無理だよなあ」

このことから、「Vヤシナイ」を用いて不満を表す際に、「Vすることが当然かどうか」は無関係であると考えられる。

3.1.3. 結論

以上のことから、「Vヤシナイ」は不満を表す際に用いることができ、発話者が不満に思いさえすれば「Vすること」が当然であるかどうかは無関係である。しかし、「Vすること」がほぼ不可能と考えられる状況下では、不満を述べることそのものが不自然となるために、「Vヤシナイ」を不満の意で用いると自然度は低くなる。

3.2. 不満以外の意味を表す「Vヤシナイ」

本節では(15b)のような、不満の意味を含んでいない「Vヤシナイ」の考察をする。

(15) b. このあたりに雨は降りやしないよ。そういう気候なんだ。

(15b)タイプの「Vヤシナイ」の意味を、直感から「強調」と言ったが、本節ではこのタイプの「Vヤシナイ」の意味を詳細に検討していく。

まずは類例を、以下に挙げておく。カッコ内は発話している状況を示している。

(36) (明日の試合には勝ちたいと意気込んでいる) 明日の試合は負けやしない。

(37) (佐藤くんの真面目な様子を不真面目な後輩に聞かせている) 優秀な佐藤くんは、仕事でふざけやしない。

(38) (百合と薔薇を飾って、百合の美しさに満足している) 百合は薔薇に劣りやしない。

(39) (彼女が遅刻しないかと心配する友人を安心させようとしている) 彼女は時間に遅

れやしない。

- (40) (悩みを一郎に相談しようかどうか迷っている友人の背中を押している) 一郎は友達を見捨てやしない。

(36)-(40)の例文は、()内に示す発話状況ではそれぞれ「不満」の意味では非常に捉えにくい。(36)では「負けやしない」ということで強い意志を表明している。(37)では佐藤くんの真面目な様を強調しており、(38)では百合の薔薇に劣らぬ美しさを確信している。(39)では彼女が遅刻するような人ではないと友人に念押ししており、(40)でも一郎の友達に対する姿勢を言い聞かせている。

このように、「V ヤシナイ」は文脈や状況によって、不満以外の意味を表すことがある。

4. 「V ヤシナイ」と動詞の種類との関連

前節では不満以外の意味をもつ「V ヤシナイ」が存在することを示した。このタイプの「V ヤシナイ」の解釈を見ると、「V する理由がない」という含意があるように感じられる。

- (41) a. 優秀な佐藤くんは、仕事でふざけやしない。
b. 彼は賢いから、そんな愚かな真似はしやしない。

(41a)では「佐藤くんが仕事でふざけるなんて行動をとる理由なんてない」の意味になり、(41b)では、「賢い彼が愚かな真似をするような行動をとる理由なんてない」の意味になる。ところが、同じ不満以外の意味をもつ「V ヤシナイ」でも、この含意をもたないものがある。

- (42) a. このあたりでは雨が降りやしない。
b. 砂場では花は育ちやしない。

(42a)では、「雨が降るなんて行動をとる理由がない」とは解釈すると違和感があり、(42b)も「花が育つなんて行動をとる理由がない」と解釈すると不自然に感じる。ではなぜ同じ不満以外を表す「V ヤシナイ」なのに、「V する理由がない」という含意がとれる時ととれない時があるのか。本章では動詞の語彙意味に着目し、この含意がどういうときにとれるか調べることにする。

4.1. 動詞の分類

影山(1996:43-44)によると、金田一(1950)は状態、行為、変化といったアスペクトの観点

に着目し、動詞に「～ている」がつくかどうか、また「ている」がつく場合どのような意味になるのかを考察した。その結果、動詞を以下の4種類に分類している。

第一種「状態動詞」：

時間の概念を超越して本来的に状態を表す動詞で、「ている」がつかない

第二種「継続動詞」：

ある時間内続いて行われるような動作・作用を表し、「ている」が付くと動作が進行中であることを意味する。

第三種「瞬間動詞」：

瞬間に終わってしまうような動作・作用を表し、「ている」が付くとその動作・作用の結果の残存を意味する。

第四種の動詞：

いつも「～ている」の形で用いられ、ある状態を帯びていることを表す。

この金田一(1950)の日本語動詞の4分類と、動詞の意思性の有無に従って、代表的な動詞を分類にあてはめ下表にまとめた。これらの動詞をVヤシナイに用いて、Vヤシナイの意味にどのように影響するのかを見ていく。

動詞の種類 行為者の 意思性	状態動詞 (第一種)	継続動詞 (第二種)	瞬間動詞 (第三種)	第四種の動詞
有	いる 要する	笑う 遊ぶ 歌う 考える	殺す 触る 買う 着く	n/a
無	ある	(雨が)降る 見える 育つ 響く	見つかる 生える 消える なくなる	劣る 似る 禿げる

4.2. 例文を用いた考察

先にあげた動詞に「V ヤシナイ」を用いて、V の意思性の有無による意味の違いを調べる。それと同時に、動詞を4種類に分類している点から、「V ヤシナイ」と動詞の間に相性の良し悪しが存在するのかどうかということ調べる。

具体的な方法としては、ひとつの例文に対し、複数の状況を想定する。つまり、不満の意で「V ヤシナイ」が用いられた時の状況と、そうではない意味で「V ヤシナイ」が用いられたときの状況を考える。その状況の共通点や相違点から意味の異なる部分を検討する。

4.2.1. 意思性のある動詞

本節では意思性のある動詞に「V ヤシナイ」を用いた例文をつくる。

主題となる例文を示したあと、ふたつの状況を記す。a は不満の意味で「V ヤシナイ」が用いられている状況であり、b は「V する理由がない」の意味で「V ヤシナイ」が用いられている状況である。

状態動詞

(43) この川にアユはいやしない。

- a. アユが生息するに相応しい清流だが、アユがいない
- b. アユが生息するには汚れすぎている川だと発話者が思っている

(44) 鈴木さんは、課題の文章を作るのに1時間要しやしない。

- a. 1時間で課題を終わらせる鈴木さんの能力の高さを発話者が面白く思っていない
- b. 鈴木さんの機敏さを発話者が知っている

継続動詞

(45) ユミコは笑いやしない。

- a. ユミコが発話者の知り合いで、愛想のなさに発話者が不満を感じている
- b. ユミコが表情に乏しい人間であると発話者がわかっている

(46) 前田くんはみんなと一緒に歌いやしない。

- a. みんな歌っているのに、それに前田くんが合わせてくれない
- b. 前田くんは歌が下手で、歌わないのは毎回のこと

(47) 5歳の姪っ子は外で遊びやしない。

- a. 小さな子は外で元気に遊ぶべきと発話者は考えている
- b. 姪っ子は家の中で絵本を読むことを非常に好んでいると知っている

- (48) 妹は先のことを考えやしない。
- a. 将来を考えなければいけない時期に妹は差しかかっているのに考えていない
 - b. 何度注意しても妹の見通しがいいかげんな様が直らず、諦めの気持ちで言っている

瞬間動詞

- (49) 彼は蚊も殺しやしない。
- a. 蚊という害虫すら殺さないことに不満を覚えている
 - b. 彼が生き物を大事にしていることを知っている上で発話者が述べている
- (50) 弟はもらってきた子犬に触りやしない。
- a. 弟は子犬を怖がっており、子犬一匹も恐れて触れない弟を情けなく思っている
 - b. 弟は動物嫌いで、自ら触ることはこれまでも無かった
- (51) 夫は家を買いやしない。
- a. 家を買ってもいい時期なのに、夫が買おうとしないので不満に思っている
 - b. 家を持つと転勤の際などに煩わしいので、夫は家を買わない主義である
- (52) 彼女は時間通りに会場に着きやしない。
- a. 時間通りに来るのがマナーであるのに来ない
 - b. 彼女が遅刻するのはよくあることなので、今回もそうだろうと思っている

4.2.2. 意思性のない動詞

本節でも、意思性のある動詞と同様にして、主題となる例文を示したあと、ふたつの状況を記す。a は不満の意味で「V ヤシナイ」が用いられている状況であるが、意思性の無い動詞はその行動をするかどうかをそもそも選択できないので、意思性のある動詞であげた b の状況(「V する理由がない」)は適用できない。このため、本節では c の状況を設ける。c は「V ヤシナイが不満以外を表す状況」とする。

なお、*をは前述したように、意思性のない動詞を適用できないことを表している。

状態動詞

- (53) この家にはお菓子がありやしない。
- a. お菓子のひとつくらいあってもよさそうなのに、ないことに不満を感じた

- b. *
- c. 家に住んでいるのが老夫婦なので、子どもが喜ぶようなお菓子がない可能性が極めて高いことが予測できる

継続動詞

(54) 雨が降りやしない。

- a. 雨が一般的な期間を超えても降らない状況
- b. *
- c. そもそも非常に少雨の地域(乾燥地帯など)の説明をしているとき

(55) 富士山は見えやしない

- a. 場所柄、富士山が見えるはずの場所なのに富士山が見えない
- b. *
- c. 富士山を拝める場所とは全く縁遠い場所にいる

(56) 花が育ちやしない。

- a. ある程度花が育つよう手をくわえているが、思うように育たない
- b. *
- c. 元から花が育たないとわかっている超高山地帯で栽培を試みている

(57) このスタジオは音が響きやしない。

- a. スタジオは音の反響がいいものと思い込んでいたのに、実際は違った。
- b. *
- c. スタジオの壁が音が響かないための特殊素材でつくられていることを発話者が知っている。

瞬間動詞

(58) 弟のカメラは見つかりやしない。

- a. カメラを探しているのだが一向に見つからず不満が募っている
- b. *
- c. 一緒に出かけたとき、弟がカメラを出先に置いていくのを発話者が見ていた

(59) 髪の毛が生えやしない。

- a. 育毛剤などを使っているのに、なかなか生えてこない

- b. *
- c. 病氣療養中で、投薬の副作用でそういった症状に陥っている

(60) 母の指輪はなくなりやしない。

- a. 指輪をなくなったら先に探し出して自分のものにしようと企んでいるのに、そうならないので苛立っている
- b. *
- c. 母は指輪を肌身離さず身につけており、なくす可能性は極めて低い

(61) 鉛筆で書いた文字が消えやしない。

- a. 消えるはずなのになかなか消えないので手間取っている
- b. *
- c. 簡単に消えない類の鉛筆で文字を書いた

第4種の動詞

(62) 百合は薔薇に劣ってやしない。

- a. 薔薇を目立たせたいのに百合が主張しすぎていると感じる
- b. *
- c. 主観的に、百合も薔薇に負けず美しいと思っている

(63) 息子は夫に似てやしない。

- a. 親子だから似てほしいが、思うように似ていないことに対する不満
- b. *
- c. 息子は自分の連れ子で夫と血の繋がりはない

(64) 山田は禿げてやしない。

- a. それなりの年齢を迎えても禿げない友人に対する嫉妬心が発話者にある
- b. *
- c. 山田が禿げているのかと第三者に問われ、実際に禿げていないことを知っているの
で、強い否定をこめて言っている

4.3. 結論

意思性の有無に関わらず、日本語動詞の4分類によって分類したそれぞれの動詞と「V

ヤシナイ」の組み合わせに、容認度の差異は生じなかった。このことから、動詞の継続性や状態性などは「V ヤシナイ」を用いる際に重要でないことがわかる。

一方意思性の有無に関しては次のような傾向がみられた。不満の意味になる例文(例文中における a の状況)では「不満を引き起こしている原因」、不満以外の意味になる例文(例文中における b もしくは c の状況)では「V ヤシナイと言う根拠のありか」が、意思性の有無によって異なる。

不満の意味になる例文では、意思性がある動詞の場合、不満を引き起こす原因は主語にあると捉えやすい。例えば(45)の文を目にした際、(i)「ユミコが笑わない事態」が不満、(ii)「笑わないユミコに対して」不満、という二通りの解釈が可能である。文脈にもよるが、例文だけを見れば多くの解釈は(ii)に偏ると考えられる。意思性のある動詞で想定されている a の状況が、主語に不満の原因があると考えられるものが多い点からもこのことが言える。

一方意思性のない動詞の場合、不満を引き起こす原因は主語と考えられる場合と明らかに違う場合に分かれている。(54)や(55)の場合は明らかに主語に原因はない。しかし(56)では発育不良の原因が育て方にあるのか、花自体が何らかの植物病を抱えているのか、天候などは定かではない。そうした一方で(57)は、不満の原因がスタジオ(の構造)そのもの以外にあるとは考えにくい。

このように、「V ヤシナイ」が不満を表すとき、意思性のある動詞を用いていると不満を引き起こす原因は主語と解釈されやすいが、意思性のない動詞の場合は不満を引き起こす原因が主語と解釈される傾向はない。

次に、不満の意味にならない例文についてである。

意思性のある動詞の場合は、発話者が主語の性質を経験上知っているというニュアンスが感じられる。「ただ一度主語が V しない場面に遭遇した」だけで「V ヤシナイ」を用いているのではない。主語の性質もしくは性格を知っており、その知識を根拠に「V ヤシナイ」ことを発話者は導き出している。主語が日常的に V していなかったり、主語が V しない場面に幾度が遭遇したということが感じられる。つまり「主語が V ヤシナイ」根拠は主語にあると解釈されやすい。

一方意思性のない動詞になると、(57)や(63)のように主語に「V ヤシナイ」根拠がある場合もあるが、(54)や(55)のように、主語そのものには「V ヤシナイ」根拠はないものもある。また、(62)は「劣らない」という完全な主観でしか述べられないことを「V ヤシナイ」を用いているので、その根拠は主観的なものでしかない。これらのことから、「主語が V ヤシナイ」根拠は特定の傾向をもたない。

5. まとめ

前章までで、「V ヤシナイ」について考察し、以下のようなことがわかった。「V ヤシナイ」には、(i)不満を表す用法、(ii)不満以外を表す用法のふたつの用法がある。(i)に関しては、「V ヤシナイ」を用いるために必要な前提などはなく、発話者が「V ヤシナイ」ことを不満に感じさえすれば用いることができる。また、不満を引き起こす原因を解釈する際、主語の性質にあるか主語以外(主語をとりまく状況など)にあるのか、どちらの解釈をするのかは動詞の意思性の有無が影響する。意思性がある動詞の場合、不満を引き起こす原因は主語にあると捉えやすく、意思性のない動詞の場合、不満を引き起こす原因は主語と考えられる場合と明らかに違う場合に分かれている。(ii)に関しては、意思性のある動詞を用いている場合は「V する理由がない」の意になる。「V ヤシナイ」と発話者が述べる根拠は主語に存する傾向がある。意思性のない動詞を用いている場合は、「V ヤシナイ」と述べる根拠は主語にあったりその他の部分にあったりと、特定の傾向は見られなかった。

本研究では「V ヤシナイ」自体の意味機能を出来得る限り明確にするために、例文を極力短くし、「V ヤシナカッタ」と過去形にしたり、「V+助動詞(可能など)+ヤシナイ」といった文は用いなかった。時制を変化させたり助動詞を用いることで解釈が変わる可能性も否定できないため、今後の研究で明らかにしていく必要がある。

また、「V ヤシナイ」には、「V ヤシナイカ」という形で用いることにより、不安を表す用法がある。

- (65) a. 賄賂の授受が明るみにでないかと、毎日戦々恐々としている。
b. 賄賂の授受が明るみにでやしないかと、毎日戦々恐々としている。

(65a)と(65b)を比較すると、(65b)の方が「明るみになってしまったらどうしよう」という不安な気持ちが前半部にも強く出ている。この用法がこの論文であげた用法と関連しているのか、全く別の用法であるのかという点や、本論文で用いなかった動詞分類でも動詞の種類間で差異は生じないのかという点を、今後調べていかなければならない。

参考文献

- 泉井久之助(1953)「否定表現の原理—一つの意味論的分析—」『國語國文』22(8): 530-544. 京都帝国大學國文學會.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』東京: くろしお出版.
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15: [ページ数]. [金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』: 5-26. 東京: むぎ書房. に再録]
- 鈴木一彦(1962)「打ち消して残る所—否定表現の結果」『国語学』第50集
- 高橋太郎(1978)「『も』によるとりたて形の記述的研究」『研究報告週-1-』国立国語研究所
- 丹保健一(1980)「否定表現の文法(1)-否定内容と文構造とをめぐって-」『三重大学教育学部研究紀要. 人文科学』31(2): 127-136. 三重大学教育学部.
- 丹保健一(1984)「否定表現の文法(4)-係助詞「は」との係わりを中心に -」『三重大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学』35: 41-55. 三重大学教育学部.
- 野田春美(1995)「ハとナイを含む否定の形」『日本語類義表現の文法(上)』159-168. 東京: くろしお出版
- 浜田敦(1948)「肯定と否定-うちとそと-」『国語学』第1輯
- 三上章(1963)『日本語の論理』東京: くろしお出版
- 三上章(1970)『文法小論集』東京: くろしお出版
- 宮地裕(1952)「否定表現の一考察」『京都府立大学人文学報』2: 44-57
- 呂寅秋(2001)「否定表現「ない」について」『新潟産業大学人文学部紀要』12: 59-70. 新潟産業大学附属研究所.